

# ノーベル賞と特許

## ノーベル賞と特許の密接な関係

- ▶ ノーベル賞はアルフレッド・ノーベル(1833年~1896年)がダイナマイト事業で得た巨額の資産をもとにノーベル財団が主催している。
- ▶ そのノーベルが事業で成功を収めることができた一因として、特許料を元手に事業を拡大したことが挙げられる。
- ▶ ダイナマイトを発明したことだけが注目されるが、特許を活用し、知的創造サイクルを回して成功した典型例といえる。
- ▶ ノーベルは、ダイナマイト以外にも、化学者、エンジニアとして合成ゴムや各種装置など、多数の発明をして特許を取得している。

## アルフレッド・ノーベルの特許

- ▶ ノーベル財団のウェブサイト<sup>[1]</sup>によると、世界各国で合計355件の特許を取得している。
- ▶ 火薬や採掘に関する発明以外にも、合成ゴムなどの化学製品や液体の測定装置、酸濃縮装置など、多岐に渡る発明をしている。
- ▶ 代表的な発明と言えるダイナマイト及びその改良品の主な特許は、以下の通り。
  - ・ スウェーデン特許 102 Dynamite or Nobel's gunpowder(1867年)
  - ・ 英国特許 1345 Improved explosive and primer for the same(1867年)
  - ・ 英国特許 4179 Improved explosive (blasting gelatine or gelatine dynamite)(1875年)

## アルフレッド・ノーベルの特許と事業拡大の関係

- ▶ ノーベル財団のウェブサイト<sup>[2]</sup>によると、ダイナマイトを発明する前の1864~1866年に、スウェーデン、ノルウェー、ドイツ及び米国でニトログリセリン関係の会社を設立し、自身が持つ特許をもとに株式などを取得。
- ▶ また、ダイナマイトを発明した後は、数カ国で特許を取得した上で資本家を探し、英国などでダイナマイト製造会社を設立し、やはり自身の特許をもとに株式などを取得した。
- ▶ 特許を活用して事業を拡大し、巨万の富を得たものと考えられる。

## 最近のノーベル賞対象技術の傾向と特許

- ▶ これまでの受賞対象は、原理・原則の発見など、論文に掲載されるような基礎研究的な成果である場合が多かった。
- ▶ しかし、2000年の物理学賞はジャック・キルビー氏のICの基本特許に関する技術を対象に授与され<sup>[3]</sup>、また2019年の化学賞を受賞した吉野彰氏も自身で特許発明が評価されたと述べるなど、実用化・商業化に向けた研究が対象となることも増えている。
- ▶ 2019年のノーベル化学賞の選考委員長を務めたクラス・グスタフソン教授がメディアの取材に応じた際、選考では「学術論文だけでなく、特許も『専門家の評価を聞き、詳細に分析した』と話した。」と伝えられており<sup>[4]</sup>、今後も産業技術に関わる特許発明が受賞対象になる可能性は高い。

[1] List of Alfred Nobel's Patents. NobelPrize.org. Nobel Media AB 2020. Wed. 18 Mar 2020. <https://www.nobelprize.org/alfred-nobel/list-of-alfred-nobels-patents/>

[2] Alfred Nobel's dynamite companies. NobelPrize.org. Nobel Media AB <https://www.nobelprize.org/alfred-nobel/alfred-nobels-dynamite-companies/>

[3] <https://www.nobelprize.org/uploads/2018/06/advanced-physicsprize2000.pdf>

[4] 読売新聞記事(2019年12月10日)